

「百姓からみた戦国時代」のタイトルに引かれて…

教科書、漫画、TV等で、戦国時代と云えば、戦国大名の覇権争いの戦さ続きの時代という認識しかなかった。

何事も表より裏の事象に興味ある自分は、「百姓からみた戦国時代」のタイトルに目が止まり、購読した。

日本史学者の書だけに、古文書等や歴史的語彙が至るところに出てきて、歴史に疎い自分には正直難解だった。

でも、何となく、次のような歴史の裏を観る視点を感じる面白さはあった。

恒常的な天変地異による災害・飢餓で、村人（百姓）は、日々生きることに大変だったよう。輪をかけ、隣村との境界線や水利争いも絶えず、村の中に争い時に率先してその任に当たる武装した村人も用意していたとか。

村同士の紛争は、衝突の時に応援を頼む村同士の合意がなされていたよう。その合意地域が領地となり、領主の誕生。村同士の紛争が次第に領主同士の紛争に発展したのは必然。領主も村あつての領地だけに、領主も村には色々気遣いもしていたようだし、村人も領主が気にいらないと、領主を代えたり、その領地から出て行く強かさがあつたよう。確かに、自分たちが生きることに精一杯で、領主にそう義理・義務もなかつたよう。

他の村からの侵略からその村を武力での保護・保障のために領主に租税と普請の任を負い、いざ戦さの時は、村の飢餓下での口減らしと、他国での食料等確保の一石二鳥のために参さへ。

紛争は、武力での解決を計ろうとし、領主の中から更に力（武力）を持つ者が、いわゆる戦国大名となり、戦さの絶えない戦国時代へ。だからか、村人の生存が当時の社会の基盤であることから、戦さは秋の収穫物や日用品の掠奪そのものが狙いであつたとか。

次第に、領主、大名の権力が増大するに従い、村同士や領主と村との自力による紛争を制止する目安制（後の法治制）が整ってきたとか。裏返せば、村が武力による紛争解決でない別の方策を望んで、領主、大名という権力者を形成、維持して行ったとも云えるよう。

自らの生存の保護・保障のために、基地の負担をする今の日本と、戦国時代の村人の領主への負担とつい重ね合わせると、時代が代わろうと武力で紛争を制止しようとする社会形成の本質は、そう変わらないのかなあ。

だが、戦国時代に目安制を考え出したように、今の世界の武力紛争を制止する国際的な「目安制」として何かを考え出す知恵も人間は持っているとも思いたい。